心ゆくまで人生を楽しむ、アーティスト

山崎史朗 水眠亭

自然に囲まれたアトリエで暮らす山崎さんは、
ものづくりとお酒をこよなく愛する、自由人。
時に音楽家、そして吟遊俳人。
男の色気漂う、ちょいワルオヤジでもある。

吉場正和＝写真　諸井まみ（TEAM H!）＝文
Photograph by Masakazu Yoshiba　Text by Mami Moroi

いろいろな人が集うリビング。右のウッドベースは山崎さんのもの

ひっそりと佇む『水眠亭』。外観からは中の様子が想像もつかない

王国を作った男たち

File03_水眠亭

彫金家、ハンドパイプ作家、グラフィックデザイナー、蕎麦職人、俳人、ベーシスト…、山崎史朗さん（57）はいくつもの顔を持つ人だ。

「人生は楽しむもの。楽しくなくて、何が人生だ」

という。

山崎さんは、長崎県の出身。高校時代を佐世保で過ごした。当時の佐世保は、原子力潜水艦「シードラゴン」の寄港をめぐり、激しい安保、原潜闘争が繰り広げられていた最中。山崎さんも青春時代を謳歌しつつ、この運動に積極的に関わっていた。余談だが、当時の佐世保での青春を描いた小説『69 sixty nine』の作家である村上龍さんは、高校での1年後輩にあたる。

「けっこう純粋に、そして真剣に反米闘争をしていましたから、当時、そのまま体制側の人間になることは考えられなかったですね」

そして、山崎さんは全国放浪の旅に出る。ある意味、自分探しの旅。この旅の途中で、築地のマグロ運び、ギターの流し、北海道の牧場で馬の世話、禅寺での修業など、とにかくいろいろな仕事や体験をし、多くの人と出会う。そして、自分のやりたいこと、やるべきことが次第にはっきりしていった。それが、絵を描くこと、そしてものを作ることだったのだ。放浪当時、将来への不安はなかったのですか？ との問いに、

「不思議と不安はまったくなかった。この手さえあれば、なんでもできる。なんでも作れると思っていましたから。人間の手は凄いですよ」

と、答えてくれた。考えてみれば山崎さんは、子供の頃からものを作るのが大好きだった。当時の子供たちの必需品だった肥後の守を手に、あらゆる遊び道具を手作りしたという。

その後、広告デザイナーの職を得たのが、26歳のとき。

「流されるのではなく、もっとじっくり仕事がしたかった」

と3年後、実家のお母さんの薦めもあり、ジュエリーデザイナーに転身する。アートとしてのジュエリーデザインの走りの頃だ。そしてさらに3年後、彫金作家として独立する。

今、山崎さんが暮らすのは、神奈川県津久井町。串川の流れを見下ろすアトリエだ。この地を見つけたのは、12年前のこと。清流の美しさと眺めにひと目惚れして選んだのだ。アトリエの名は、『水眠亭』。水のそばで眠るようにひっそりと佇む、という由来がある。

この家が建てられたのは、文化文政の時代。今からなんと200年ほど前になる。まるで廃墟と化していたこの家の屋台骨だけを残し、山崎さんは改築を始めた。建具を入れ、壁を作り、友人、知人の助けを借りながら、およそ4年の歳月をかけ、このアトリエを作り上げた。

使った建具のほとんどは大正時代のもの。どこかで古い家が解体されると聞くたびに、もらって来ては集めた。

「ポスターなんかもそうだけど、大正時代のものは、デザイン的に美しいものが多い。明治以降に入ってきた西洋的なものと、日本的なものとの融合が、ちょうど成熟した時代だったからでしょう」

窓に入っているガラスも今のようにクリアなものでなく、ちょっとゆがんだも

のや、すりガラス。いつの間にかクリアなガラスに慣れてしまったせいか、この家のガラスを通して見る景色は、とても懐かしい感じがする。光によって見える形、色が変わってくるし、差し込んでくる光もとてもやさしい。

「毎日見ていても、飽きることがない。それに落ち着くでしょう?」

窓枠には古い水車、2階の手すりには流木、艶のある太い梁、和紙や木ぎれを使った照明の数々など。それらがすべて一体となり、モダンで独特な雰囲気の空間を作っている。

2階には、囲炉裏もある。そして京都の桂離宮の月見台を模して作られた桟敷。月はもちろん、初夏には蛍、秋には紅葉、そして川のせせらぎ、ヤマセミやオオルリなど遊びにくる何十種類もの鳥たち…四季折り折りの風情が楽しめるという、とても贅沢なスペースだ。

「改築のテーマは旨い酒が飲める場所をつくること。そういっても過言じゃない」

と、山崎さんは笑う。

そして、薪で沸かすお風呂、彫金の仕事場など、アトリエ自体が山崎さんの作品なのだ。

「家づくりは、究極のものづくり。一番楽しいですよ」

アトリエはこれで完成ではなく、ギャラリー、茶室、桟敷の拡大など、これからも改築は進む。オーストリア大使館から譲り受けた薪ストーブや大正建具の数々が、使われるのを待って倉庫に眠っている。

「本来家とは、生活スタイルの変化に合わせて自ら改築していくものなんです」

子供の頃からものづくりを続けてきた

山崎さんがひと目惚れした串川の清流。ヤマメも釣れ、少し上流にはおいしい湧き水も

上／赤々と燃える薪。「薪で沸かしたお風呂は、本当に温まります」。右／囲炉裏に置かれた五徳は友人の手作り。『水眠亭』の文字が見える

王国を作った男たち

File03_水眠亭

山崎さん手づくりの薪風呂。「まだ改装中、これから屋根をつけます」

山崎さんだが、40歳を過ぎて本当の楽しさがわかってきたのだという。

「売っているものは、なかなかいいものがない。いいものは無駄に高い。だったら自分で作ったほうがいい」

家だけでなく、自分が使うものは基本的に自分で作る。だから、山崎さんが作るものは、男性的なものが多い。

「わがままおやじの道楽グッズです」

中でもパイプ制作は年季が入っている。きっかけは放浪時代。

「北海道の牧場で働いているとき、友人のおやじさんにもらったのが、イギリスの3Bのパイプ。それ以来、僕はほとんどパイプです。パイプは、自分の好みに合わせて葉っぱをブレンドできるのがいいんですよ」

20代の頃に自分用にと始めたのだが、極めていくうちにいつの間にか作家になっていた。口コミで広がり、今でも注文が絶えることがない。パイプに限らず、山崎さんはほとんど営業をしない。だから、すべて口コミでの注文制作だ。そして評判が評判を呼び、いろいろなところから依頼が来る。最近は、ほかの作家とのコラボレーションも多数。

「人とのつながりはとても大切。僕は人によって生かされている部分も多い」

そのほか、俳句、お茶、華道をたしなみ、7年前に始めたというそば打ちも、いまや専門の職人以上の腕前。しかも、お茶以外は、すべて自己流だ。

「世の中、器用貧乏という人はいっぱいいるけれど、山崎さんの場合はどれもすべて極めている。そしてオリジナリティがあるところが凄いと思う」

と、友人である陶芸家の碓井直弘さんは言う。

「作ることは、生き方そのものだと思う。いいものを見て、感覚を磨く。そして勉強する。〝明日死ぬつもりで今日を生きよ、永遠に生きるために学べ〟。僕はこのガンジーの言葉のように生きたい」

山崎さんは自由人であると同時に、学ぶ人でもあるのだ。

そしてもうひとつ、山崎さんにはベーシストとしての顔もある。始めてベースにふれたのは、高校時代。米軍払い下げのベースだった。そして流れていたのはジャズ。それ以来、ジャズとベースは、ずっと山崎さんと共にある。憧れのプレイヤーは、日本のジャズベースの草分け的存在でもある故・吉沢元治さん。

「将来は、ベーシストとしてやっていけたらいいな」

と、茶目っ気たっぷりに笑う。

ここには、いろいろな人が訪れるが、中でもミュージシャンが多い。特に決められているわけでもないのだが、月1回は即席コンサートが開かれる。この日も『水眠亭』にはたくさんのミュージシャンが集まり、日が暮れる頃からフリーセッションが始まった。アトリエの中が、とても心地よい音の波に包まれる。メンバーを見て驚いたのが、年齢もジャンルもバラバラなこと。20代前半の若者から、山崎さんと同年代の50代まで、音楽を仕事にしている人もいれば、ガラス作家の高橋禎彦さんのように趣味が高じてという人もいる。インドの民族楽器バンスーリー奏者、スペイン人のカルロスさんの姿もある。

「初めて来たとき、大人たちがとても楽しそうに、そして自由に音楽をやっている姿を見てガーン、となりました。ライブハウスとかだと、やっぱり演奏する側と聴く側に分かれていて、ジャンルとか決まり事もたくさんある。自由に音楽ができる空間って、意外とないものなんですよね。それはなんか違うなと思っていたので、水眠亭に僕が目指した音楽があるって、嬉しかった」

大学生の頃から通っているという、佐野寛さんは言う。佐野さんは昨年から、「水眠亭に集まろう!!」というイベントを開催。同世代のバンドが集まり、また音楽の輪が広がった。この日集まった中で

たびたび行われる『水眠亭』でのセッション。夜中まで続くことも

王国を作った男たち

File03_水眠亭

は、20代のバンドメンバー田中佑司さんと田辺玄さん、三浦千明さんもそのときの仲間だ。

「ここは自然の音もあふれていて、とても居心地がいい。音楽だけではなくて、いろいろな会話やおいしいご飯もあって、大人の人たちとも同じ目線で、つきあえる。僕が架け橋となって、人の輪が広がるのも、うれしいですね」

と、佐野さんは言葉を続けた。

演奏が一段落する頃、山崎さんの手打ちそばが振る舞われた。

「ここのそばを食べたら、ほかのそばは食べられないですよ」

というのは、山崎さんと同郷のギタリスト、宍野潤司さん。みんな我先にと、そばに群がった。

「うまい！」の声が飛び交う。そばのほかにも、宍野由記子さん、中村徳子さんの心づくしの料理とお酒で賑わうテーブル。そして会話はいつしか、文化論や環境論にまで発展していった。

夕闇の中の『水眠亭』。ガラスから漏れる光がやさしい

上／そばを打つ山崎さん。今夜のそばは山形から取り寄せた新そば。下／このそばが楽しみで通ってくる人も多いとか

「古き良きものを愛する、捨てられたものに新たな命を吹き込む。そういったことはとても大切だけど、過去に固執するのとは違う。時代は流れているのだから、新しいものを受け入れる柔軟な心がなきゃいけない。僕はそう思います」

ここに流れる、世代を超える自由な空気は、山崎さんが醸し出している雰囲気そのものなのだろう。

ずっと自由人として生きて来た山崎さん。アトリエでの暮らしを後押ししてくれたのは、「親父、自由にやっていいよ」という、当時中学生だった息子さんの言葉だった。その息子さんも既に独立。今は、メロン、くーちゃん、マサカドという3匹の猫と暮らす。山崎さんのような暮らしに憧れる人は多いが、実践している人は少ない。

「わがままを貫き通すのも、それはそれで大変なことなんですよ。でも、これがやりたいという強い思いがあれば、世の中できないことはありません」

と、山崎さんは笑顔で語った。

上／「素遊居」と陰刻された琴は囲炉裏の部屋に飾られている。書も山崎さん作。下／手づくりの箱膳の上に並べられたアクセサリーと茶道具の数々

左／和紙使いが美しい間接照明も手づくり。右／手づくりのパイプとパイプ台。奥にあるホワイトヒースの根塊を削って作る

DJブースにもなるバーカウンター。中央のウイスキーボトルは、陶芸家との共作。ボトルキャップと絵付けは山崎さんが担当した

中秋の一日、桟敷で日本酒を楽しむ山崎さん

生きることは自然とふれ合うこと
美しい景色を眺め、季節の匂いを感じ、
自然の恵みを食し、水の音を聴く
そして素肌のまま自然のぬくもりに身をゆだねる
感覚を研ぎ澄ませ
五感すべてで感じること
それが人生に喜びをもたらす
進化した現代だからこそ
もう一度原点に帰りたい
忘れてはならない大切なことだから

水眠亭
神奈川県津久井郡津久井町青山2264
TEL_ 042-784-6662
URL_ http://www.suimintei.com/